

滲み出る心

著者	石崎, 博夫
雑誌名	龍南
巻	2 0 6
ページ	2 8 - 4 2
発行年	1928-06-15
URL	http://hdl.handle.net/2298/9000

滲み出る心

石 崎 博 夫

久保田君。君も御存知の通り僕は難駭な頭腦の持主だから、或はこれは論理的調整を保つて居ず、言はんとする事が前後撞着して居るかも知れません。併し僕の意のある所を抽象して讀んで下さい。

久保田君。これは僕の現在の生活様式ではありませんが少くとも僕の、現、在、の、理、想、です。昔から「時は金なり」と言ふ諺があります。それは一般には「時」といふものは貴重なる故を以て怠惰を戒め勤勞を勧める言葉の様に解されて居りますが、併しこれも精神的な方面にも適用する事が出来ると思はれます。即ち或時には只の不完全な概念的な觀念としか思へなかつたものが星巡り刻移つて遂には完全な自身の體驗的な、眞の自分の内から滲み出て来るものとなつて来るものです。それ故に僕のこの理想も今少し時を経てはその過誤も曝露され不完全な意に満たぬものになるのは必定です。そうでなくとも理想といふものは野の草叢の如きものだと言ふではありませんか。休んで涼を求めんとし今居る所より更に青々とした所を見付けて行つて見れば矢張元と同様なまばらな草地だと言ふのでせう。これは現在の僕に取つては理想であり野原の彼岸に見える青々とした叢です。

我々は現實を離れて生活する事は出来ません。従つて我々は社會を離れて生活する事は出来ません。個人を離れて社會は存在せず、社會を離れて個人は存在し得ません。プラトンは「人はエトスの乳を呑んで育つものであると言つたさうですが如何にも穿つた言葉だと思ひます。(エトスとは風俗、習慣、制度といふ程の意ださうです) 現在の我々を肉体的に育み、精神的にその本然的素質を抽出し色附けて呉れた過去の社會、即ち現在の「既に成りしもの」としての自己の環境としてでなく、現實生活の足場として、吾人の内面的理想に即する所として個人と不離であります。各人の有する精神的資産はその屬する社會から與へられた材料を己が思考の方式に於て、己れを結合して所有としたに過ぎません。社會と個人との關係は全体と部分との關係であるのみならず魚の水に於ける關係です。それ故個人の人格的完成は社會のそのの進歩です。而して又我等の種々の要求や理想は現實社會に即して起る故に、吾人の眞の要求や理想の本質を認識せん爲にはその前提として現實社會の確乎たる把握 明透なる凝視を必要とします。而して吾人の抱懷する理想要求はかくして出來た淨化された渾一体であります。即ち現實を規定し、意義附ける當時の社會と不離であります。

而して一方その社會なるものも單に吾人の日常經驗する經濟的物質的對大衆的社會のみならず、實に多數なりと言はなければなりません。一般に社會は吾人の統覺する立場如何に依つて生ずるものであつて、特定の場合の特定の側面の一形式なのです。例へば經濟行爲的態度を以てすれば、我々の日常經驗する如き經濟社會が生ずるのであります。社會は吾人を中軸として交互し錯綜し、或は對立し併立して居ります。そして吾人は少くともその一つ以上の社會に交渉し、出入して居るものであります。

然るに今他の一面より視察して見ますと、吾人人類はすべて生活といふものの中に二つを包攝して居ります。即ち一は吾人の欲望價值を満足さす方便たる生活とて他は吾人の理想價值を意識する生活とであります。即ち自然的本能的欲求に依つて行動の律せられる生活様式——これは自然科学的に因果律に支配されて居るのですが——と理想的自由意志的要求に基く生活態度とであります。今一つ次の様な事が言はれるならそれが一番普遍的だと思はれます——即ち、ミユッセン (Miyussen) に依つて生活が規定される方面とゾツレン (Solten) に依つて動く方面とであります。

さてこれで吾人は社會とは必然的に不離であり。社會の數は多數あり、その生活様式に二方面ある事が解つて來たのです。それで如何なる社會に交渉を持つかは、その人の先天的傾向性（性格）と内面的欲求とに依つて定まつて参りませう。併しその目的は個人的價値の完成と言ふ事をにおいては他にないでせう。個人的價値の完成は、自己を中心として考へて見れば自分の有する天賦の才能を充分に發揮する事でありますが。他の一面より觀れば自己の對象とする客觀的事象の全價値を出來得る限り充分に自己の内心に反映させる事でなければなりません。そしてその自己の内心に充分に反映させる事の爲に、自己を移入すべき對象たる客觀的事象もその取る社會に依つて異なるものです。それは自己の意志の統覺如何にあるものであるから夫々千種萬様と言はねばなりません。そして今の僕としては、その理想の生活様式も生活する社會も孤獨であります。

併しながら言葉といふものはそれ自身運命を荷つて居るもので、何の氣なしに投げられた言葉が偉大な深い手で大きな内容を持つたものとして擲ひ上げられる事もあります。それ故僕に取つても抽象的な言葉は、その内容には幾分類同性はあるにせよ、比較的自由的な内容を盛る容器に過ぎぬ場合が多あるのであります。かかる場合には此處ではこんな意味に使つて居るなどと思つて戴けばよいのですが、事を簡單にする爲に、此の空漠な捕捉し難い内容を持つて居る孤獨といふ言葉を今の場合大体次の如く解していただきたいのです。即ち、外界の現實に足の離れぬ程度の交渉を持ち、最も理想的價値の方面を高調し、自分の胸奥を殿堂として眞の自分の「價値意識を創造する」如き生活態度である。自己に忠實ならんが爲に、部分を通じて全体性を把握せんと欲する故に。

二

凡そ社會と個人との外部的關係に於て觀れば、孤獨には二様の形式が存在し得るのです。即ち相互の反撥の方向が心理的に相反するもので、一は個人が社會を反撥するもので、他は社會が個人を反撥するものとであります。併しながら外部的に孤獨と見えるものでも、眞にその言葉の意味する様な孤獨は存在し得ないのです。それは「特定の場合の特定の側面の一形式」であるからです、例せば個人が社會を反撥する方向の見て見るに（それは或見地よりすれば個人の狹介な氣質、及び天才の一般世間より

超進したる見識などを、社會が消極的に反撥したと見られますが、今は積極的の方面のみに留めて置く事とします。今非常に超越的な哲學者があつたとします。そして彼が俗世間を嫌ひ、深山幽谷に逃避したる場合に、空間的には或種の社會からは離れて居るのかも知れませんが、心理的には他の社會——古昔の賢哲或はその瞑目的な幽邃絶塵な環境に於ける友人等の思出——に交渉を保つて居ります（この孤獨の形式に就いては谷川徹三氏著「感傷と反省」に負ふ所大であります）。第二の場合も同様に見る事が出来ます。それ故孤獨としては前記の生活様式の中、後者を高調して價値の創造に生き、自己に忠實なる事を計るのみ可能であります。今事を簡單にする爲に——そして幾分論理的にするために——この生活態度に於ける對內的（對主觀的）態度と對外的（對客觀）態度とに分けて、それによつて考へる事に致します。

三

對內的態度

昨日は雨降りでした。そして今日はまだ大地は濕を帯び、あたりの一木一草、砂や石の無生物まで、一時に靈魂を天席に依つて賦與された様に、生命に満ちて居ります。そして又其處らの「切割り」からは、水がちよろ／＼と滲み出て居るのが見えます。それは或時は晴れたる午后の空に漂ひ浮んで、その浮々した姿を池の中に倒に投げて、池中の生物を驚かし、嬉々として風に吹かれながら通り過ぎた雲、又或時は感傷的な淑き人を、恐ろしい入道形をした軒端のたたずまゐに恐怖せしめた雲の一片であります。併し一度彼等は多分な濕氣を含んで雨となりて大地に喰ひ入り、ぢり／＼と大地を滲み抜いてちよろ／＼と流れ出て居るのです。併し考へて見ると雲の如き無生物でも靈魂あるものの如く、時には大地の内部に喰ひ入つて沈潛するではありませんか。我々も雲の場合の如く快樂な生活もよいであらうが——それも必要であらうが——時には後者の場合の如くに我等の魂の中に喰ひ入つて深き沈潛の生活も必要ではないでせうか。實際ニイチエも言つて居る如く我等に降りかかつて來る苦痛、哀愁、懊惱を真正面から積極的に受容し、苦しみに苦しみ抜き、悩みに悩み透つたそのどん底より丁度「切割り」に於けるちよろ／＼と流

れ出る滲み抜き水の如く、又火山の噴煙が地球の内部の然焼によつて煙を吹き上る如く——雄々しくも湧き出て來る生活の肯定こそ、この孤獨に於て味はるべき——そしてそのみが眞の生命でせうが——獨特なるものでせう。即ち此處に於いて味はるべきは沈潜の心です。

自分が自分によつて占領されて居ること——自分が眞の自分であること即ち先驗的立場に於ける「我」——これ程此の世に於いて眞であり、善であり、美であることはいないでせう。これ實に眞善美の融合點であります。私は私である (Ich bin Ich) の立場（或はこれは立場以前のものでせう）はフアウストが宇宙の符號を借らずして「地の精」に呼びかけたそれでせう。自分自身を包擁して自身自身で縁取りして境して居る此の廣い海は實に白銀の波打寄する所、橄欖の綠輝く處、暖かな風の紅濃かなる花を匂はする樂園であります。此の海に投げられたる思想は、柔かに起伏して左右に撞着を生じながら、遂には生命と價值とを附與されて海底へと凝集されて行きます。併し一方ふはくと浮き漂ひながら生命と意義とを與へられず、遂に波の爲に岸邊に打寄せれる思索もあります。併し時折此の大海へ網を投げるものがあります。それは讀書によつてであり、思索によつてであります。その網の投げ方にも亦色々あるのです。或人は自分の現在に躊躇して狹隘なる自己自身を中心としてその大海の中よりそれに相應するもののみを拾ひ集めんとし、何等獲物の無いのを見てそれに價值がないとか、共鳴せぬとか言ふ者もあります。又或者は心に待つ所あつて自らの中に未知の最高なる者への憧憬と苦悶とを待ち、以て眞に價值あるものとなるべく多く拾得せんとして居ます、併し後者の場合に於いては肯定と否定、受容と拒斥とを明瞭に區別し得るを前提とする事は勿論です。

此の場合のこの舟たる讀書には二つの比較的顯著な傾向があります。ニイチエは次の様な事を言つて居ります。

「學者は書物をめくらぬと考へぬ。彼が考へるときには彼は刺戟即ち讀んだ思想に對して答へるのだ。結局彼は單に反應するきりだ。學者はその全力を既に考へられたものゝ肯定と否定とに、即ち批評に用ひる。さうして彼自ら考へぬ。(中略)即ち天賦ある豊富にして自由な素質を有する人が、己に三十歳にして擦つて貰はねば火華——思想——を發しない燐寸に過ぎなくなつた。夜明早く人間の力の極めて新鮮なるとき、——人間の力の曙け初むる時——書を讀む。——余は實にかくの如きをこそ隨

落といふ」。(此の人を見よ (Ecco Homo) 安倍能成氏譯)

長きに失する如き引用を致しましたが、これは僕等には、否僕には、餘りにも激しきに失する警語であります。僕のような思惟能力に乏しき者に取つては。

併し客觀的に觀れば、讀書の態度は單なる批評——批評それ自身を目的として居る者は問題にせず、——に止るべきではない燐寸を擦つて火花の出るのは、燐寸の軸にそれを發すべき力の發酵、即ち或る外的契機に對する内の充實せる内在的潛在的な待つ所のものがあつたからでせう。火花を發してから、更に大きな赤き焰を吹きながら燃えるのは自己自身の力でせう。外面的契機によつて導火されても、爆發し燃燃するのは自分自身であらねばなりません。外面的動機によつて内面的燃燃まで、規定されてはなりません。孔子は嘗て「吾嘗終日不食。終夜不寢。以思。無益。不如學也(衛靈公第十五)」と言つて居ます。これこそ凡庸な我等に普遍的なものでは無からうか。畢竟導火線が他にあつても、自分の力で燃え、その思想が生活に即し、生活が思想に準じて居れば思想の獨立性は保持されるものではありませんか。一望千里、猛獸のみ行き交ふ不毛の曠野には、獨立の思想は稔らず、必ずその前にはその土地が外力によつて充分に耕されて種子が落され、十分の支持があるに非れば、豐饒な果實の收穫を期する事は出来ないでせう。孔子は又(孔子が凡庸だと言ふのではなくその考へが普遍的だといふのです)

學而不思則罔。思而不學則殆。(爲政篇)

といふ言葉を遺して居りますが、これ即ち、凡庸な僕等に妥當な言葉ではありませんまいか、即ち大海に漕ぎ出された讀書といふ舟に乗つて居て、それより大なる價值への期待と憧憬と謙遜との大きな網を投すべきであつて、獨力で泳いで行つてその網を投すべきではないでせう(これは勿論僕の主觀的の、僕自身にのみしか妥當しない考へ方でせうから、何も君にこれを強ひる意志は少しも有りません)。

併しながらこの樂園にも、折々暴風雨が襲ひ來ます。それは生活は不斷の創造的進化なる故に、必然的に否定、破壊を隨伴します。これに伴ふ痛苦、懊惱を必然的の條件として吾人の生活は進轉するのです。この苦惱の中普通なものは、憂鬱や哀愁等の

如く否定的消極的感情であります。併しながら眞の孤獨に於いては憂鬱は孤獨そのものに依つて淨化されるものでありますし、又過ぎ去りし物を回顧する哀愁は、前より價值あるものに對する所の憧憬によつて克服されます。我々がかかる感情を超克する爲には、排除の力、否定の力、生活態度轉換の力、或は對象を專念に凝視する力などが必要です、併し眞に孤獨せんとするものにはかかるものは所有される様になるものだとい僕は信じて居ります。さうでなければかかる憂鬱や非哀や哀愁などを客觀視——これらのものの中に主客混一して移入されればそれ自身消極的否定的感情でなく何んとも言へない肯定となるでせう——して不滿に生き、恆に荒涼寂漠たる坦々たる道路を行く様で、到底かかる生活には堪え得られぬと思はれます。實際否定としての破壊は肯定に對する必須條件であります。そして眞に偉大なるものは、アンチテーゼ (Antithese) の克服からのみ得られます。「三太郎の日記」にこんな事が書いてありました。即ち

「月影の凄い晩に、草を藉いて寢て居た若い羊飼の口に蛇が忍び込んだ。羊飼は咽を蛇に噛みつかれて悶え苦しんだ。ツアラトウストラは有らん限りの聲を、絞つて、『噛み切つてしまへ。蛇の頭を噛み切つて了へ』と叫び立てた。羊飼はその聲に勵まされて懸命に蛇を噛んだ。そして蛇の頭を噛み切つてから今迄人が笑つた事のない様な朗かな笑ひ方をした」と。

吾等も此羊飼が蛇の頭を噛み切つた様に、憂鬱や悲哀の首を噛み切つて、より價值ある理想への生活創造の段階にダイアレクリテイシユ (Dialektik) に進まなければなりません。今一度一時の否定の中に如何なる人格の肯定が包擁されて居るかを考へて見ませう。上述の苦惱の中で、人格を痲痺させ、世界的一切を、宛もくすばつた屋根裏の下宿屋で青春に歎いで居る若人の如く、苦惱に見てるものと見させるものは、此の苦惱の消極的否定で、今一つは内面的鬭争的な活動によつて生の肯定にまで誘導して行く否定があります。即ち積極的な否定とでも言ふのでせうか。それには「苦惱の中に在つて、これと一体になつて鬭争してこれを超克することや、男々しく苦惱に堪へつゝ、苦惱の力を全身に感受しながら自己を主張するや、將又苦惱に對して讓歩して自己の人格を肯定する——醉漢の股を潛る韓信のその如く彈性的讓歩によつて自己の内面を緊張させる」——ことなど種々の積極的主張はあるけれども、凡て一應の意味に於て生の否定たる苦惱を超克することによつて、遂には止揚されて生の肯定を見るの

である。表面的の苦惱を透して、奥底に流れるその人格と生との輝に至ること、眞の孤獨に於ける意義であります。凡て苦惱を感受する能力の程度は、その人の人格と生命との深さに比例するものであります。一度び苦惱が超克されると萬有凡て生命に輝き、心は今此の世に生れ出たもののその様に輝き、新生の喜悅は眞に味はれます。兎に角「不満を客觀化して恒に悲哀に生きて居る」様な者のよく堪へ得る所ではありません。かかる事を書くにつけても僕の人格の薄弱と生命の淺く不純さとは絶えず、蛙を呪ふが如くに狙つて居る蛇の如く、附き纏つて自分の奥の方の薄陰へ隠れて哄笑して居ります。實際苦惱を積極的に感受し自我の意識的、狀態を排斥し、生活の渦中に突入し、怒濤にもまれる海中の生物の如く、その底に純深なる生命として、存在の永劫の快樂に没入する生活こそ、眞に祝福された、眞の孤獨に於いて味はるべきものでせう。眞にこれこそ生命です。

第三に沈潜の生活に於いて必要なる事は反省でせう。即ち内省です。自己省察です。直接觀照的把握です。内省は自由な無意識な内面的活動の流れを一時中途で堰止めて、その前の堰——或はその遠い遠い小さな水源にまで——溯上して、その生命の創造的進化の流れを、意識的に探求する事であります。生じた沈溺物を檢束する事なのです。反省といふ事は種々の側面を有し統一的に進行して居る世界、全体的に無意識に創造されて行く「我」に、「生」そのものに、幾分でも停滯を生じた時に生ずべきものでありませうが、この堰あつてこそ、次の堰まで再び勢よく進む事が出来るのでせう。それは丁度我々が物事を認識する場合吾人の意識内に於ける觀念の限定作用と同じこととせう。今野原に眼を投げて見ますと青々とした青緑の若草の間に、可憐な蓮華草が所々縁取りして居るのが分ります。その場合吾人の意識内に於て綠と赤と（或は又他の色も交ざつて居りませうが）の觀念の限定作用が無かつたなら、色といふ視覺の感覺だけの方面から言つても、どうしてそれらを青緑な若草と赤い蓮華草だと認識する事が出来ませう。それと同様にこれからの内省、自己省察はこれらの觀念の限定作用の如きものであります。そして前者の場合に於ける限定作用は哲學者は超越的自意識の識意作用なりと説くやうに聞きますが、後者の方にはかかる超越的なものの助けはなく（反省を知的に觀れば矢張それを超越的なものの働きに基くものとなすのでせうが）此處に於いてただ範疇否規範と目さるべきものは否定と肯定との明確なる峻別といふものでせう。語を具体的にする爲に少し飛躍して考へて見ますと、この反省と

いふものを生命あり、價值あるものとなすものはただ確と足場を踏みしめて、對象を凝視把握し、その否定と肯定、受容と拒否執着と嫌惡の別を確然と明白峻烈に押立てるといふ事でせう。少しこの事を考へて見ませう。

一般に否定は肯定を豫想してのみ價值あるものです。單なる否定は無意義で、然も有害で、「否定」の否定としての意義が疑はれるものです。絶對的に無價值です。今例を取つて見ますと、自分の有して居ないものを他人が有する時に、その價值を否定して、以て自己の天與や怠惰を蔽ひ、姑息の手段で自己の寂滅を慰撫せんとする人があるといふ事があります。かかるものは破壊の爲の破壊で建設の爲めの破壊ではなく、絶對的に有害なものです。若し他人の所有するもの（具體的に言へば美とか權力とか富とか）を自分の目指す或他のより高き、より權威ある價值の膝下に於てその價值を否定するのならば、これは肯定の爲めの否定なる故に始めてその否定としての生命と價值とを獲得するものであります。聖フランシスはドン・ファン的な淫蕩生活を否定することによつて彼のように、神の殿堂に參じて、自己の胸臆を自己自らのものとする事が出来たのである。併しながら後にあの様な肯定的宗教生活が繼起しなかつたならば、先の否定は坊間の老人の懺悔的否定に過ぎず、老人の愚痴に、酔醒めの浮言に過ぎなかつたでせう。後に隨伴する——隨伴すべき——肯定がないならば、先行の否定に何の價值があらう。故に吾人は、就中孤獨の生活に沈潜せんとする者はこの否定と肯定をよく辨別しなければなりません。何事をも無頓着に受容し、何物にも強く執着せず、否定と肯定との別を確立しないのは、「必要に依つて凡ての者に肌身を許す呪はれた娼婦の生活」の如きものでありませう。而して實に否定は肯定の一種、肯定は否定の一種であつて互に相反撥するものではなく、却つて互に包攝的關係に於いて存するものであります。故に此の生活に於て沈潜の心を味はんとするものは、否定と肯定とを峻別し、肯定のみが有り得ぬ如く、否定のみ存在し得ぬし、否定も肯定を豫期してのみその價值あることを体して、堰止められた自然的内面活動を檢束すべきであります。實に内省は文化的人格、智的自我的存在の徵驗であつて、正しき内省は正しき行爲の源泉をなすものであります。即ち吾人人類の生活を左右する有力なる指導力ともなるべきものであります。

第四に眞の孤獨に於て味はるべき、そして不可欠のものは謙遜と愛であります。この二つは畢竟するに同一の事だと思はれま

す。そしてそれは否定と肯定とを明確に峻別することにより、必然に起つて来るものであつて、徒らに「人格の高調を彈壓束縛する羈絆や、他人の前で猫をかぶつて」「私はつまらぬものですからどうぞお見逃しを」といふ奸者の處生術」や或は他人の個人的幸福の満足の爲に、自己を犠牲にする誤れる愛とは全然正反對の方向を指すものであります。それは眞に尊重、輕侮、反撥一言にして蔽へば肯定と否定を解し自己を飽く迄主張する心であります。徒らに自己の現住の小さな局限に踟躕して、小我を守り偉大なる價值に對して逃避的態度を取ることに非ずして、自己に待つこと大に、眞の偉大を孕む襟度のあるものです。即ちこれに由る生活は自己の小さな形式を對象に當て候めてそれに盛られる少しの物を、宛も鼠が盗み取つて來た獲物を薄闇の陰へ逃れて計算して喜悅する様な態度に非ずして、眞に自己を空しくして——即ち自己の有する種々なる偶像、偏見、先入主等を徹底的に排除して——對象の内心に没入して互に生命を交換し合ひ、一塊となつて動き、以て對象を理解することに努むる態度であります。

我々の「我」、我々の文化的人格の大海より、上の如き讀書により、寄せ来る苦惱の超克により、内省により、謙遜により、愛により掬ひ上げられるものは眞に生命躍如たり、價值横溢たる、立派な獲物であります。徒らに概念的思辨により、論理的錯綜によつて得られたものではありません。内に燃ゆる内的生命の焰の横溢であり、アカデミー的反趨動物のそれでは決してない。實に全世界を動かし得る確固不動のもの——、その「價值」に於いて不動にして、その「生」に於いては恆に「聯關」と「構造」に於いて創造的進化をなすもの——、即ち如何なる思辨も、如何なる懷歎も侵入する餘地のない内的經驗であります。君は恐らく汚れを瀧過する所を見た事があるでせう。それは苦しい矛盾を透して幾度の陣痛を経過して此の光の國に生れて來た一滴一滴です。人間的な「力」——自分の内心より必然的に滲み出て來るこの泉を拒否して、これと殆んど無關係の一の典型、一の規範を作り出し、環境に織りなし創造される萬有を、この中に強ひて盛り、その溢れる所を無理に投げ捨てて、これをのみ高調せんとする所には必ず頽廢が伴ひ來る、精神的萎縮が伴ひ來ます。

自己の内面より必然的に湧起して來る泉の水を掬んで飲みながら、これを自己の未來に對する規範とせねばなりません。我々

は我々の純粹なる内的經驗——Solten——によつて行動を律せなければなりません。即ちよく倫理學の例として引用されるものでありますが、上官の命令によつて惡徳を餘儀なくさせられた場合を考へて見ませう。彼の自然的な、因果的な環境は彼をしてその行爲を肯定させるかも知れませんが、彼の「當爲」は彼をして否定させるでせう。これこそこゝに言ふ所の内的滲出即ちSoltenなのです。これこそ眞の自己なのです。何物にも煩らはされぬ自己自身の殿堂からの閃光なのです。意識の統一体たる人格なのです。

我等は孤獨に於て眞の自己を見出さねばなりません。「われ自身」は「われ自身」を占領しなければなりません。孤獨とは徒らに假面舞踏會を隨處で唄さぬといふ事ではなく、魂の中心を常に自己のうちに把持する事なのです。我等は孤獨に於いて、眞の自己の價值意識を見出さねばなりません。即ち孤獨は渾一體なる「生」の進行の過程に於いて「價值意識の創造」でなければなりません。眞の孤獨は内的必然性によつて、自分の魂の中から數々の價值を抽出創造するものでなければなりません。

四

對外的態度

かゝる場合には何時も言はれる様に、凡ての對象の見方に關しては二つの方法があります。即ち簡單に言へば事物の周圍をぐるぐる廻るものと他は對象の内部に突入してそこに眞の價值を認めんとするものとです。そして前者は對象に對する視點や表現として使用される記號の如何によつて異なるもので、相對的であり偶然적であるのに對し、後者は内部に於いて全体を把握して居る故に何等の視點もなく、何等の符號も用ひられぬ故に、絶對的であり、必然的であります。都市の寫眞をいくら撮影して組立てた所で立体的な都市は現はれません。對象の眞の姿相、眞の生命價值、眞の心は吾人がその内部に自らの生命を移入してそこに於いて把握されてこそ可能なのです。事實我等は多面的な智識、概念的な思辯にのみよつては、理解結合されぬ多數を餘りにも持ち過ぎて居ります。吾人のただ事物の外面的觀察や思量のみ——ただの悟性の活動のみ——に於いては、事物の眞相に到達

してそこに眞の生命を把持する事は不可能です。故に我等は此の立場に於いては、必然的に後者に據らなければなりません。

青緑滴り、百花爛漫と咲き亂れる陽春の頃に至れば、生命横溢して、自ら浮き立つを感じ、又萬物凋落の秋に、奥山に紅葉踏み分け啼く鹿の聲聞く時は我々は何となく哀愁を催します。又他人の涕泣するを見聞すれば彼の心の悲しみを知り共に悲しくなり嬉笑を見聞すれば相手の心に喜を認めて自分も何んとかなく喜しくなるものです。それはただ因果的な生々果々の一事件か、顔面に於ける一種の變化か、喉から出る特殊なる聲音とかに過ぎないものですが、我等は見聞といふ特殊な物質的官能の深奥に精神的意義を見出します。五官を通じて五官以上のものを受容します。それは何故か。

今悲劇的な活動寫真を見て居るとします。それを見て我等の中に哀愁や苦悶の起るのは、その映畫を見ることによつて我等自身の内面に體驗されるもので、決して映畫そのものの、中にあるものではありません。その映畫を觀照して居る間は主觀も客觀も融合し、互に一体となつて自己といふものを意識することはありません。對象を統覺してゐる自己はその時の自己全体であり、對象全對であります。映畫が終つて反省に歸り、觀照より離れる時になると、主觀と客觀とを意識する様になります。そして對象に於ける生命價値は自己自身の生命價値なのです。即ち對象の觸發によつて對象に移入された自己の生命なのです。つまり對象の生命價値は自己に取つては、自己の生命であり、自分の人格であります。即ち世界の事象の生命は自己に取つては、自己の生命の投影です。對象の生命は我等の意識に取つては、對象の中に置換へられ、同時に様々に變容された自己自身の人格に外ならぬのです。（此處に半ば引用的に叙述された感情移入説は阿部次郎氏著「倫理學の根本問題」及び同氏著「美學」等に負ふ所大です。詳しくは同書について参照して下さい）

そしてこの説は廣く一般に適用されるものですが、今主として美學にその説明を求めたのは別に深い意味はありません。ただ僕の頭の中に「美感は智識成立の條件に伴ふ先驗的感情である」といふ言葉が何故だかこびりついて居たためです。

これは要するに我々が概念を用ひて對象を分析する象徴的認識は相對的認識たるに止り、流動の中に入つて、對象そのものと一になつて直觀による認識は決して相對的ではない。そして生命の象徴として吾等が統覺する對象の生命價値は吾人の人格の投

影であると言ふのを言ふためです。こゝに言ふ直観は普通に言ふ直観——時間、空間、カテゴリーによる超越的自意識の働き——ではなく、謂はば藝術的直観です。そして又この「直」の字に何等の時間的制約はありません。それは概念的思量や、「人格的我」ならざる單なる「我」——自己の好惡、利害、偏見等を有する「我」の中介を経ざる直接の觀察なのです。それ故にこの直観はベルグソンの言ふ様な一種の智的同感であらうと思はれます。兎に角、我等の對外的態度、即ち物象の統覺に際して取るべきものは純なる我を對象の内心に滲透して、そこに生命の交感を得て、以て相手を觀察理解する態度なのです。而して我々には直観により内部より把握して居る實在は少くとも一つは確實に持つて居ります。それは時間的に進化する我々自身の純なる「我純粹なる「人格」です。然るに世界の萬有は吾人の意識内に於いては吾人の人格の投影なのです。而して又人格は内的必然性によつて生命と價值とを附與される思想、感情、欲求の統一体でせう。それ故にこの生活に於ける對内的、對外的の兩方面に於いて、吾人の人格は凡ての根本です。

今一つ附加して置くべきは（これは此處に現るべき役割ではないのですが）我々は外面的智識のみによつては眞に理解結合されず、我等は概念なき眞の理解を持つものです。故に眞の孤獨の沈潜的態度に於いてこそ人々は相互に魂と魂と、心と心とがその奥の深い所で聯り、妙なる音を響かせながら共鳴し、眞の人間の共感を覺えるのであります。故に自己の忠實ならんと欲せば孤獨するし、特殊を通じて普遍性を把握せん爲には孤獨によるより外はないのです。徒らに思索は「われ」だけの問題だ、行爲は「われ」に對する自己と「かれ」と「なんぢ」に對する自己との二方面に關する故に二重の反省を要求する故を以て孤獨を求むるものは卑怯であり、去勢者の生活です。シラーは「人間は遊ぶ時にのみ完全な人間である」と言つたといひます。それは人が自己に忠實に物を深く痛切に且つ自由な態度で經驗する時に於ての意でありませう。併し今少し駒を進めて見ませう。

五

結 論

「沈潜の心を以て『我』より『彼』を凝視し、『彼』を『我』に即して自己省察しながら、がたがたな車を汗を流しつつ引き。坂をやつと此處まで來て見ると距離は少しも進んで居りません。思ふに盲目的に矛盾の糸をたぐりながら、同じ所を往來して居たのでせう。兩足を踏張つて車を必死と、片手で抑へ付け、片手で汗を拭ひながら少し立止つて見ると、眩がしさうです。少し頭を落付けて見ますと、あたりは混然たる矛盾の堆積です。眞の『自己』も、『我』も、『人格』も皆その中で窒息しさうです。さうだ、あたりはまるで毀れた水道の様です。即ち、塵芥や草鞋の切端や竹や木が澤山満充して、水が通らうともしない水道なのです。通さうとするとつかへて溢れてしまひます。併し最後に少し掃除して氣だけでも通して見ませう。

西田幾多郎氏は嘗て或雜誌に次の様な事を言はれた。

「象徴は意味と存在との結合である。物體的なるものと精神的なるものととの結合である。象徴の最も淺薄なるものは符號である。言語の如きも一種の符號に過ぎない。符號に於いては意味と存在との結合が外面的であり、偶然的である。象徴の意義が深くなるに従つてその結合は内面的となり、必然的となる……而して象徴的結合は先驗的世界（心と物との分れぬ以前）に於ける結合でなければならぬ」と。

實際象徴は先驗的立場——この眞の孤獨に於ける自己が自身によつて渾一体になり、完全に獨占され、認識主觀と認識客觀に分れぬ立場——に於いて最も價值あるものです。この内的必然的經驗は固定したのではなく、絶えず流動的進化をなします。此の場合僕に眞に本質とされるものはこれによつて創造されます。時間、空間、因果の三範疇の束縛より脱して一度びこの先驗的渾一的立場にかへる時には、或特殊の精神の表現としてこの世界はそのまゝ一の象徴となります。此の世界に沈潜することによつて、『人格的我』の中に自然を見出し、一切を見出し、善惡、美醜、大小、正邪、好惡の彼岸たる物心一如の神境に到達することが僕に取つては出来るやうに思はれるのです。

これは或は「反抗するものなき眞空に登らんとする鳩」の悲しき然も得意なる啼き聲かも知れませんが、僕はどうしても次の如く叫びたくなるのです。

「煩瑣なる思辨を捨てよ。光り輝く内的經驗の燈火のみを携へて真理の塔に攀ぢよ」と。

△ △ △

孤獨もこゝへ至ればかの自分自身の個性の意義と價值とを絶対に肯定して「我」獨りを實在とし、我一人の中にのみ生きんとする彼の浪漫的個人主義とは大いに異なるものです。即ち浪漫的個人主義に於ける個人といふ觀念が、幾重にも濾化され、淨化されて、無限から無限へと「聯關」と「構造」に於いて創造的進化をなす「人格的我」を以て本質となし、これを以て社會に存在し、特にその智的道德的並びに宗教的活動を重視せんとするものであります。それ故強ひて名を附さなければならないとすると、「浪漫的個人主義」と言つたなら、幾分その内容を酌むことが出来るでせう。

『天を仰いで笑ふがよい。地に臥して泣くもよい。我等はかゝる樂天主義や厭世主義には參する事は出来ない』と最後に悲しい聲をあげて筆を擱きます。

「これは他書より引用した個所も多くありますが、それはその途次お断りしたのもありますが、中にはその煩に堪えずただの鍵印で済ませた所が多いのです」